

勸修寺墓参顛末

やりかけの宿題は山のようにあるのに、勸修寺見学にウカウカと乗ったのは、去年の春の山科の桜を忘れかねたせいであつたかも知れない。昨年四月、京博のついでに訪れた山科はちょうど満開で、十禅寺から安祥寺への道すがら、疏水河畔のしだれ桜が水面に影を落し、すっかり王朝の春を満喫した気分だつた。その折の勸修寺もよかつた。正面の新奇さとは逆に、庭は奥へいくほどに時代を経た自然なたたずまいで、時の経つのを忘れさせた。今年の山科行は、ちよどそんな心のうちを見すかされたようなタイミングの誘いである。お寺を一時間ばかり見学して、ちよつとした対談をするのだという。花にはかなり早い二月末、物好きにももう一度深入りしたい思いに駆られたのである。当初、企画社P H Pのタイムテーブルでは、見学予定は寺だけで、けちな私に云わせれば勿体なさすぎた。この機会に山科めぐりをしない手はない。合流する前のとき、近くに散在する勸修寺関係の陵墓を一人でめぐろうと思ひ立ち、待ち合わせ場所の変更を申し入れた。するとそれも皆で一緒に行こうという。方向音痴が一人で探しあぐねる覚悟でいたのに、結局、下調べの行き届いたぜいたくな墓参団となつてしまった。以下はその一部始終である。

勸修寺は醍醐天皇の生母胤子の外祖父、宮道弥益の宅を醍醐即位後に寺にしたものといわれる。胤子は藤氏良門流高藤と、弥益女列子の間に生れた長女であるが、弥益は宇治の大領という身分であつたから、飛び切りの玉の輿という事になる。もつとも、胤子が後の醍醐天皇となる維城（後に敦仁親王と改名）を生んだころ、維城はおろか、その父源定省

後藤祥子

（後の宇多天皇）も皇位とはおよそ無縁の一介の王族に過ぎなかつた。つまり、摂関家とはいえ傍流の高藤の女と、時代にとり残された古皇子（後の宇多天皇）も皇位とはおよそ無縁の一介の王族に過ぎなかつた。つまり、摂関家とはいえ傍流の高藤の女と、時代にとり残された古皇子の三男坊、源侍従定省との結婚はさほど身分違いというわけではない。それに較べれば、高藤と列子の結婚はやはり列子にとっては数段の身分上昇ということにはなるであろう。その数奇な巡り合いと再会のロマンを描いたのが世にいう『勸修寺縁起』である。『うつほ物語』俊蔭巻の俊蔭女と小若君（兼雅）のロマンスの種本、あるいは『源氏物語』の明石一族の栄達の原型としてよく知られた話柄ながら、以下の考証のために簡単に触れておこう。

高藤十五六歳の秋、洛南に鷹狩にでかけて俄雨に遇い、雨宿りした豪族弥益の宅で一夜を明かすこととなり、当時十三四の弥益の娘列子と契る。しかし帰洛後、心にかかりながらも供人の離京で再訪の手がかりを失い、数年後、供人の帰京を待つてようやく訪れてみると、あの夜一夜孕みで生れた女子（胤子）が五六歳に成長していた、というロマンスである。やがて胤子は宇多後宮に入内し、所生の皇子（醍醐）が立坊・即位、胤子も立后、列子にも弥益にも位が贈られ、弥益宅は高藤の子・定方の手で寺に改められ、定額寺となる。縁起のあらましはこのようなのだが、この寺院、国家寺院という公的性格よりも、胤子の後見・定方の子孫（勸修寺家）の氏寺のような私性格を持つ事になった。定方の忌日八月四日には子孫による法華八講が催され、宇多源氏から座主が輩出するといった具合である。しかもこの

地には、弥益夫妻を祀る宮道明神その女列子の墓（宮道古墳）があるのは当然として、胤子や醍醐天皇の陵、高藤や定方の墓まである。いわば宮道家の周辺に、宇多を除く関係者がすべて吸い寄せられた感じなのだ。

小野陵・小野墓・宮道古墳

ところで、醍醐陵や胤子皇太后の小野陵はともかくとして、列子や高藤の墓は一般の旅行案内や地図ではその所在が明らかではない。平凡社『歴史地名大系』や角川『地名大辞典』にはそれぞれの町名が記されているから、なんとか尋ねあてられるかと多寡をくくっていたが、そのためには詳細な住宅地図を手に入れ、地図上では空白になっていた所在地を勧修寺のご住職に前もって伺うという周到な準備が必要であったという。突然ひとりでぶらりと平日、などという生やさしいことではなかったのだ。町には新しくびっしりと家が建てこみ、行きずりの町の人たちはそんな大昔の由来を知る由もない。わずか小一時間で、小野陵・列子墓に参り、高藤墓の所在を実見できたのは、P H P 研究所の山口毅氏の周到な手配のおかげであった。

小野陵は名神高速道路を見下ろす小高い山の中腹にあった。登り口は広々としてはるかに陵墓が見上げられる。竹林に挟まれて整備された坂道を登っていくと、宮内庁お定まりの陵墓のたずまいがある。坂道を挟む竹林の外はすぐ坂なりに民家が立て込んでいたが、陵墓の周辺はものものしく厳かである。そういう荘厳を施されたのは言うまでもなく、維新後のことで、その昔、狐塚と呼ばれたという近世以前の小野陵は、一時期おそらく今の高藤墓と同様、参道もなくこれといった目印もない小山だったに違いない。それでいて里の人々は、その変哲もない小山を、われらが祖先の皇太后さまとして敬愛しつづけてきたのではなからうか。そうした陵墓のありようは、胤子の生母・列子の墓を詣でるとよく分る。宮道古墳と呼ばれる列子の墓は胤子皇太后の陵墓にくらべ、はるかに小

列子・胤子・勧修寺の訓み

ちなみに、列子・胤子の母子を私も普通、歴史家の慣習に従って音読みにレッシン・インシと味気ない読み方で通している。今回、勧修寺のご住職・筑波常遍師の解説を伺っていて、師が列子を「タマコ」と呼ばれていることに気付いた。この読みは当寺に伝わる勧修寺系図のふりがなで近世の施訓であらうという。胤子の読みは「ツギコ」だそうである。ついですが、勧修寺を私自身は長いことカジュウジだと思ってきたところが地元のタクシーなどではカンシユウジと訛らずに発音しないと通じない。しかし今回、筑波師のエッセイ「仏のえにし」（平成七年二月二二日刊、淡交社『京の古寺から』4 勧修寺）筑波常遍・横山健蔵共著）で、お寺自身はカジュウジと読み慣わされている事を知った。国史大辞典や国書総目録では公卿の家名としてはカジュウジ、寺名としてはカンジユウジとっている。私は双方を短絡させていたことになる。当時の読みはどうであらうかと思っていたところ、たまたま小林一彦氏からいただいた抜刷に出羽弁集が引かれており、それにはこうある。

周防前司隆方、去年の師走に親におくれて勧修寺といふ所に籠りあてなげくにやりし

山里に霞の衣きたる人春の景色をしるや知らずや（出羽弁集三）
かへし

限りあれば霞の衣きたれどもたちいでぬ身には春も知られず（四）ここに隆方というのは勧修寺家の定方から数えて五代、西堂長者（後述）十一代になつてゐるから「勧修寺」は勧修寺に相違あるまい。歎・勸の魯魚の紛れはいかにもありそうで、春は平仮名の「す」のつもりであろう（大斎院前御集にも同様の表記がある）。修を「す」と訓ませる例は少なくない。伊勢物語九段「うつの山」の修行者も表記は「す行者」、更級日記の「修学院」は「す学院」である。もともと、拗音表記に慣れ

きな丘（円墳）である。民家の間を縫う、車一台がようやく通れるほどの小道の脇から、竹藪を分けて十メートルほど斜面を上るともう頂上に着くようなほんの小丘で、頂の平地の木立の中に、二寸四方ほどの細く小さな今出来の石塔らしきものがあり、表に「宮道朝臣列子之墓」と記してある。墓前の地面にじかに懷紙を敷いて、お餅とネーブルオレンジを供え、花立てに真新しい菊とカーネーションを生けてあったのが印象的だった。娘の胤子の墓が宮内庁設置の鎖に護られて一般庶民の接近を拒んでいるのとは対照的に、列子の墓はまさに、今なお、近隣の人々にとつて「われらがお姫さま」であるらしい。陵墓へのこうした親しみ方は、はからずも数年前に訪れた洛北の小野陵（惟喬親王墓）を思い起させた。そこも無論、近代以後の宮内庁管轄による化粧を施されているのだが、その厳かな陵墓の下段には小さな祠があつて、ちようどそれは八月の末であつたが、近くの民宿のご主人が草を刈り、櫛を供える所であつた。月はじめにはいつもそのようにするのだという。土地にゆかりある貴人の陵墓は千年以上の歳月をそうやって、土地の人々に護られて来たのに違いない。土地の人々はたとえ貴人の嫡流に栄枯盛衰があつたとしても、いづれ身内が家来筋の子孫という意識があつたであらうから。

今、列子の墓の踏み込み口には、山科市ライオンズクラブの寄贈になる案内標識が建つ。前近代の身内意識はすでないであらうが、列子はいまも「われらがお姫さま」であるらしい。そこへいくと高藤の墓はやや不遇である。交通の激しい幹線道路の側に、民家の後に隠れるようにして鬱蒼と樹木の茂る小丘がそれで、鍋岡山とも小野墓とも云うらしい。登り口もなく降りても無駄だということで、車上から通りすがりに眺めるだけになつてしまった。生前の内大臣、死後は正一位太政大臣を追贈された高藤が、埋葬当時に妻の列子以下の扱いを受けたはずもないが（だからこそ墓墳の伝えが今に残るわけだが）、今現在の高藤・列子夫妻の人気の違いは、なにやら女性上位的現代の風潮を連想させて奇妙である。

ないために「す」と表記して「シユ」の心持ちで読むらしい所からすれば、聞きなしは「カンシユウジ」か、あるいは国文・国史の世界での寺名と同じく「カンジユウジ」とするのが穏当かも知れない。

高藤は果たして十五歳だったか——胤子は姉さん女房——

ところで勧修寺縁起によると、高藤と列子がめぐりあつたのは高藤十五六歳の頃となつてゐる。今回、あらためて縁起を読み直しているうちに、果たしてほんとうだろうか、という疑問にぶつかった。高藤は公卿になつたので、生没ははっきりしている。かりに十五歳の時とすれば仁寿三年（八五三）の事だ。一夜孕みで列子が身籠もつたとして、胤子の誕生は遅くも翌齊衡元年でなければならぬ。夫になる宇多天皇こと源定省はまだ生れていない。定省が生れるのはさらにそれから満十四年後の貞観九年（八六七）の事である。胤子は十五歳も姉さん女房だったのだろうか（堀河天皇の嫡后篤子内親王は夫帝より二十歳年上であつたけれどもこれは特殊なケースである）。さらに胤子を八五三年生れとした場合、長子の維城（醍醐）が生れたのが胤子三十二歳、次子敦慶親王の誕生は胤子三十四歳、敦固親王の時三十六歳、敦実親王三十七歳、柔子内親王三十八歳、ということになる。醍醐帝を筆頭にこれだけ続けに子女をあげている所からすると、胤子が結婚後、初子をあげるまでに長い間があつたとは考えにくく、定省・胤子夫妻の結婚は醍醐の生れた仁和元年（八八五）の前年、光孝即位の前後ではなかつたらうか。この年十八歳の花婿に三十一歳の花嫁、という組合せになる。できれば胤子にはもう少し若くあつてほしい。もともと胤子の年齢には異説があつて、『中右記』康和五年正月二十六日、鳥羽生母女御苅子卒去の条に「女御非常例」の一として胤子を引き、「女御藤胤子 寛平八年六月三十日卒（廿一）内大臣高藤女、醍醐帝母也」とする（平凡社『日本歴史地名大系』）「京都の地名」藤原胤子陵の項に導かれての参照である）。ただ

しこの説に従えば胤子の誕生は貞観十八年（八七六）、父高藤三九歳の
ことになってしまふ。鷹狩の夜に孕まれた女子と宇多女御を必ずしも同
一人とせず姉妹と考えられればそれでもよいが、たとえそうとしても、
八七六年より二年も前に、後に醍醐朝の尚侍（妃に準ずる）となる満子
までが生れており、肝腎の醍醐生母がその二歳下というのでは話になら
ない。あるいはまた廿という表記は三十の古い表記に誤られやすいとい
うので、廿一が三十一の誤記かとすれば、列子所生の次子定国と同年と
なつて、この際該当しない。よしんば、同年中に年子の生れる可能性が
あつたとしても、この場合に限つていへば、『縁起』が、胤子と思しき
最初の女子の誕生から数年、高藤と列子は相逢う事がなかつたと云つて
いる点は、この説話の眼目であるだけに重視しなければならぬであろ
う。とすると結局胤子は、高藤の二十一歳の頃（八六〇年頃）生れた
とするのがもつとも自然ではあるまいか。それでも結婚相手の定省王か
らすれば七、八歳の年長となるが、十五歳の開きよりは穏当であろう。
どうも私も、結婚適齢の男女比でいうと、長いこと女のほうが二三
歳若いほうが一般的であるかのように思い込まされて来、ようやくここ
へ来て姉さん女房が見直されてきた風潮であるが、どうして古代は結構
これが一般的であつたのだ。源氏物語の葵の上などは年上なのが不和の
もののように考えられているが、冷泉帝と斎宮女御、夕霧と雲井雁など、
一夫多妻が普通であつた古代では初婚の姉さん女房はむしろ望ましい形
態と考えられていた節がある。新猿蓑記の第一妻を二十歳も上に設定し
ているのは少々戯画的であるにしても。

ここまで突き合わせてきて、角川の『日本地名大辞典 京都府上』が
「世継物語」「今昔物語集」を引いて、高藤の鷹狩を天安元年（八五七）
のこととしているのに気が付いた。ただし「世継物語」にも「今昔物語
集」にもそれらしい年代確定の記述はない。しかし辞典の記述に根拠が
あるとすれば、胤子は八五八年生まれという事になるうか。胤子と定省
との差は一〇歳（満九歳）違い、高藤十九歳ころのことになる。いずれ

にせよ胤子は数歳から十歳ほど夫帝より年長であつたはずで、『縁起』
は話をいやが上にもロマンチックにする為に、高藤・列子の出会いを実
際よりも数歳若く設定したのかも知れない。

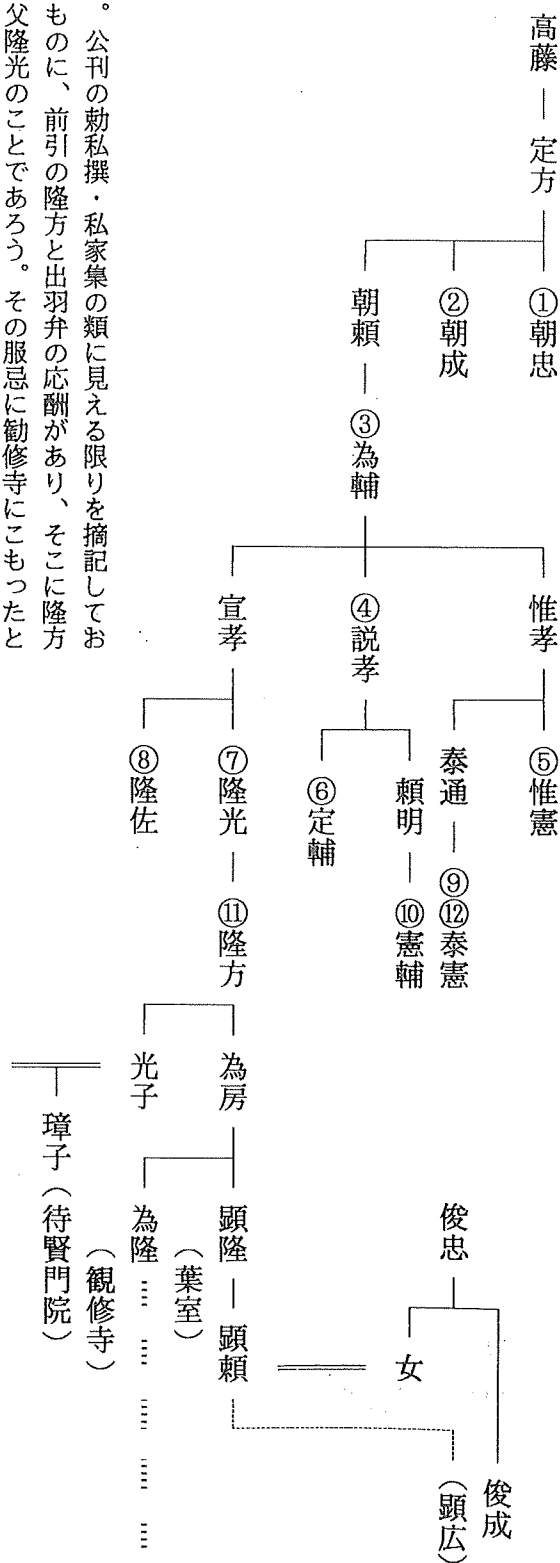
勸修寺家の氏寺継承

勸修寺が醍醐御願の伝をもちながら、醍醐寺の国家寺院的性格に対し
て、高藤の子孫、いわゆる勸修寺家の氏寺的性格を持つものであること
は先述した。その事は『勸修寺旧記』（続類從七八一所収）におさめる
「西堂長者次第」というものによつて如実に実感される。西堂は本堂の
西に定方が亡母（列子）の菩提を弔う為に建てた小堂であつたらしく、
定方の死後はその子たちによつて定方の命日（八月四日）毎に法華八講
が営まれたらしいが、その長者の初代が定方男朝忠である。その後、長
者は弟朝成から甥の為輔へ、その子説孝へとつた具合に継承され、ま
さしく藤原宗家の興福寺経営や春日大社参詣における氏長者の雛型的形
態をとつたらしい。その継承の順序は父子相伝というより、その時その
時の一族中の長者（年長の高位者）であつて、古代族長の帰趨をはから
ずも見る思いがする。藤原宗家のそれが、国家権力と不可分であるだけ
にきわめて不幸な身内争い（たとえば長徳の変）を生ずる事もあつたの
に對して、こちらはそうした権勢とは無縁に、むしろ一族の祭祀の責任
という、権限よりは負担の方が大きい役割であるだけに、より純粹なか
たちでひきつがれていったようである。長者次第は十一代までは分注で
実名を記すので、継承関係を以下に図示しておこう。十二代以降も特定
できるはずであるが、今その暇がない。

勸修寺をめぐる歌々

さて、これらの人々には当然の事として、勸修寺にまつわる詩歌が少

『西堂長者次第』による勸修寺家略系図



公実

なからず存する。公刊の勅私撰・私家集の類に見える限りを摘記してお
きたい。はやいものに、前引の隆方と出羽弁の応酬があり、そこに隆方
の親であるのは父隆光のことであろう。その服忌に勸修寺にこもつた
というのである。隆光の生没は明らかでないが、出羽弁集の記事がほぼ永
承六年と思われるから、五年暮れの死没と思しい。勸修寺は一族にとつ
て、まさしくこうした機能を果たす寺だつた。

次はやや飛ぶが、院政末の頭頼の釈教歌

保延二年（一一三六）勸修寺にて三十講おこなひ侍りけるに、

法華經序品の心を

民部卿頭頼

一人のみ尋ねいるさの山深みまことの道を心にぞ問ふ（玉葉集釈教）
勸修寺法華三十講もかつての八講の伝統を引くとすれば八月四日のそれ
であろうか。そうした折毎に詠草は書き残された筈で、『碧山日録』な
どで惨状が窺える応仁の大乱以前、そうした雅会記録の蓄積は想像に余
りある。

鎌倉期に入つては『藤原光経家集』の次のようなくだり、

勸修寺僧正成宝（実イ）、池辺に水閣をかまへて管絃あるべき
よし先日対面の時語られ侍りしを、その後心にかかるよし申し
侍りしついでに

思ひやる池のみぎはの松風にたぐひやすらん糸竹の声

以下、五月二日、同じ僧正の房で「暁郭公」「夕早苗」「寄山祝」題、
同三日「山家夏」「池辺松」「寄船恋」題など。あるいは甥光俊（後の
真観）主催の勸修寺詩歌会や宮道明神への奉納和歌が見える。

貞応二年（一一二三）三月一七日、前右少将光俊、勸修寺にて
詩歌合し侍りしに 花開古寺中といふ事を

をのづから花や主と問はるらむ古き野寺は住む人もなし(家集八六)
軒荒れてしのぶ青き白妙の花の下なる春の山寺(八七)
ちなみに、同日の題は他に「暮山霞色多」「水郷春望満」、探題「野外残雪」「河風」「池鷺」、また「山水落花多」。必ずしも勸修寺界隈の風光を素材としないが、右二首や次の野寺題にはその面影があるか。

同題を女房にかはりて 花開古寺中

尋ね来て花見る人のまたもあれな古き野寺の春の夕暮(九三)

あるいは「六月十九日、勸修寺にまかりて前右少弁のもとにて夏水といふ事を」(一五二)以下「夏草」「夏月」三題、「宮道明神にのみて奉りし歌のなかに、春山」(一五五)以下「夏水」「秋雨」「冬松」「旅夕」「述懐」題があるが、その述懐題は

洩らすなよ我がふる寺に契りある宮道の神の広き恵みに(一六〇)とあって、実景にちなんだ詠み口になっている。勸修寺詠には次のようなものもある。

勸修寺歌合に、深山花

雲や花はなやしら雲みよしの山もかすめるあけぼのの色(四七六)以下「古寺郭公」「海辺月」「靄中雪」「夕松風」と続く。光経は勸修寺為房の六世の孫、後年高野に入ったが、妹に順徳院乳母従三位経子があり、経子所生の光俊(右少弁、後の真観)に和歌の手ほどきをした人物とされる。光俊の父すなわち経子の夫である中納言光親も同族の葉室頭隆四世の孫、承久の変で横死した。光俊もこの時流刑に遭うが帰京後頭を剃って高野に入り真観を名乗る。右の勸修寺詩歌合はごく若い在俗時のもの。

その光俊に、まさしく勸修寺縁起を題材にとった一首がある。題して「小鷹狩」(新撰六帖 第二)。

ふる雨に栗栖の小野の小鷹狩ぬれしぞ家のはじめなりける
六帖の左注に、「言塵抄云、此歌は高藤の栗栖野へ鷹狩の心也。光俊、此の子孫也」という。そもそもこの新撰六帖(寛元六帖とも)は光俊が

家良や為家・知家・信実と互角で詠みあったことで自信をつけ、当時為家に親近して娘たちをも近付け、彼らの和歌評定の席にも物を隔てて陪席し、誇り顔であったと『源承口伝』にいう。その昔、父俊忠早世後の俊成が頭広を名乗って頭領の養子だった縁もあって、御子左家とは身内意識で接したらしい。そうした場で勸修寺縁起は、家の古い因縁を折々に喚起したようである。

最後に関係年譜と、一般の観光案内では手に入りにくいと思われるので三陵墓の入った市街図を付しておく。

なお、中世末の秀吉の伏見道造作による寺領没収の経緯や、勸修寺をめぐる近世和歌について、鈴木健一氏に御教示を仰ぎお手を煩わせた。今回触れるに至らなかったが、厚くお礼申し上げたい。

【参考文献】

勸修寺縁起(群書類従四三〇)

勸修寺旧記(続群書類従七八〇)

今昔物語集二二―七「高藤内大臣語」

世継物語(続群書類従九五二)

野口元大「交野少将とうつほの俊隆」『古代文学論叢三』武蔵野書院昭和58

小林茂美「源氏物語論序説―王朝の文学と伝承構造―」桜楓社 昭和53

石川 徹「平安時代物語文学論」笠間書院 昭和54

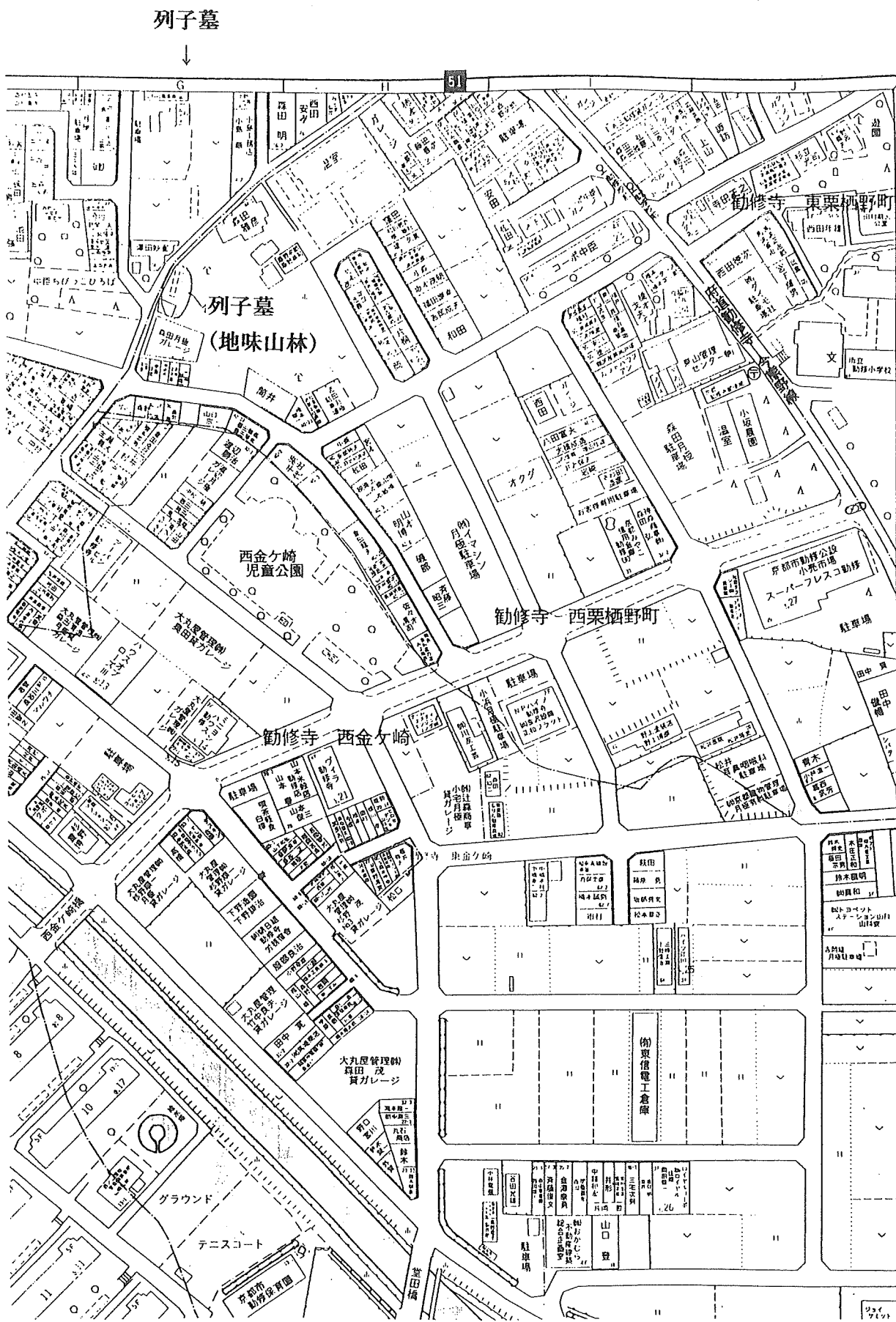
日向一雅「源氏物語の主題」桜楓社 昭和58

福田秀一「中世和歌史の研究」『鎌倉中期の反御子左派』角川書店昭和7

筑波常通「仏のえにし」淡交社「京の古寺から 4 勸修寺」1995-2

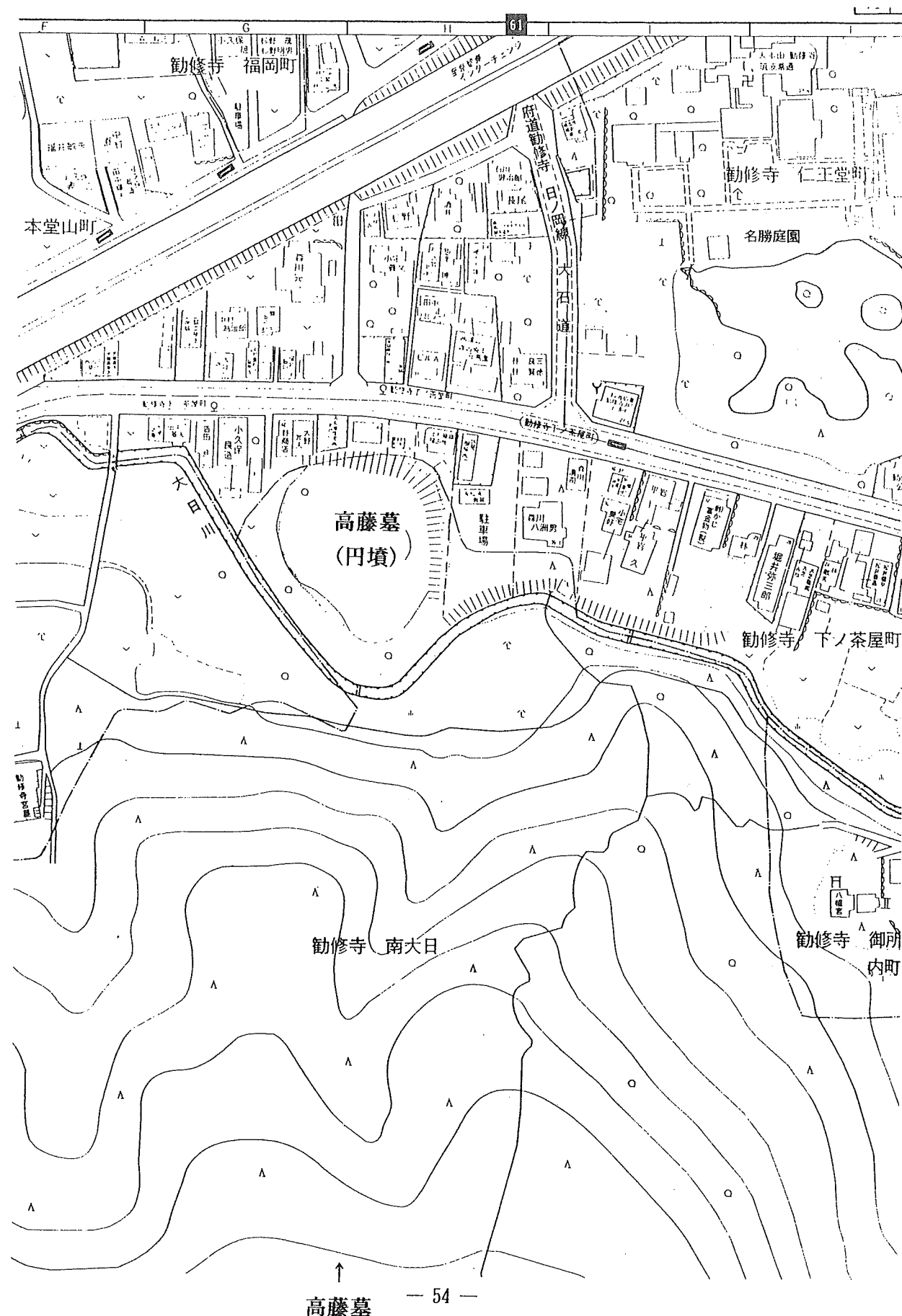
ほかに国史大辞典／日本歴史地名大系27 京都市の地名(平凡社)

／日本地名大辞典 京都府上(角川)／古事類苑 宗教3／大日本地名辞書 吉田東伍／京都叢書／日本名所風俗図会8(角川)／小山利彦『源氏物語と風土』武蔵野書院



観修寺年譜

- 838 高藤生
 853 高藤、鷹狩で列子に遇う（実は857～9ころか）
 854 胤子生（実は858～860？）
 866 定国生。
 867 定省親王（宇多）生
 873 定方生。
 874 満子生。
 884 高藤任讃岐介。 定省元服、為源氏(18)。胤子と結婚か(胤子31？ 26？)
 885(仁和元) ■敦仁親王(醍醐)誕生(丑18日)、本名維城
 886
 887 高藤兼近江介。 定省為親王。即位(21)。 敦慶親王誕生。
 888 高藤聰禁色雑袍。 胤子為更衣(30？)
 889 高藤兼伊予権介(少将如元) 敦固親王生？
 890 高藤叙正五位上。任兵部大輔、叙従四下。 敦実親王生？
 891 高藤兼伊勢権守。 柔子内親王生(六条斎宮)？
 892 高藤任播磨権守。
 893 ■敦仁親王(醍醐)立坊。胤子女御(35？)
 894 高藤叙従三位。
 895 高藤任参議(58)。
 896 高藤兼近江守(59)。 △6月30日胤子死去(38？紀略)后。
 897 高藤任中納言、正三位。宇多譲位(31)■醍醐即位(13)△7月19日胤子に贈皇太后。
 899 高藤任大納言(62) 宇多出家(33)
 900 高藤任内大臣、薨(63)、贈正一位太政大臣。
 902 承俊任律師(元大威儀師、勸修寺根本)。濟高任別当。
 903 天皇、為贈皇后供養神筆法華經(日本紀略)
 905 承俊卒(12月7日)・勅為定額寺(9月21日、扶桑略記23・類聚三代格4)
 906 ■崇象親王(保明)立坊
 906 定国薨(40)
 907 命婦宮道朝臣烈子薨、叙正二位。満子為尚侍。
 910 濟高給官符(59 鴈39)
 911 定方5男朝忠生(母山蔭女)。坊中納言
 912 満子四十算賀(定方行 913？)
 917 定方6男朝成生
 918 濟高任長吏職(8月8日 次第)
 920 朝頼男為輔生。 延喜年中建立西堂(朝忠)(旧記)。
 925 公家(醍醐)修母后御忌於勸修寺(旧記)。別当濟高為権律師(8、23)。
 930 ■醍醐崩御。
 931 宇多崩御(65)
 932 定方薨(八月四日)。以来開八講(旧記)。朝忠、西堂長者。
 937 満子薨(64)
 931～938(承平実録帳、旧記)
 942(天慶5) 濟高入滅(11、25、86歳)
 944 貞誉(権律師)任檢校(承俊弟子)。遍覚任別当(35、濟高弟子、八条大將息)。
 947 柔子内親王(六条斎宮)供養御塔、願文(旧記)
 954 遍覚卒(56)。



955 雅慶任別当(31。敦実親王息、遍覺弟子)。
957～961(天徳年中、宮道氏建立西堂。旧記)
970 天禄ころより、朝成、西堂長者。
976(貞元)為輔(帥中納言)西堂長者。
1004(寛弘)説孝 西堂長者。
1012 雅慶大僧正入滅(88)。
1013 済信任別当(上東門院宣、左大臣雅信息)。
1014 隆方(宣孝孫)生(勸修寺5代)
隆方女、從二位光子、大納言公実室、待賢門院璋子母
1016 光慶阿闍梨任別当(上東門院宣、雅慶弟子)。
1030 信覺僧正任別当(21 東宮宣、公季息)
1049 為房(勸修寺6代)生 参議・大蔵卿
1053～58(天喜年中)本堂(宮道弥益鷹屋跡云々)焼亡。大蔵卿隆佐造立(三昧堂)。
1070 為隆(為房一男)生 参議・左大弁
1072 顕隆(為房二男)生 按察大納言(葉室)
1076 勝福院(憲輔建立)供養。
1077～81 「故卿殿承暦記」アリ。
1084 別当信覺僧正任入滅(74)。大僧都厳覺任別当(29、信覺僧正弟子、参議基平息)。
1094 顕頼(顕隆一男)生 帥中納言、九条民部卿。俊成養父。
1135 勝福院(憲輔建立)焼亡。
1115 多宝塔(鍋岡麓)按察某建立(依亡母遺命、周忌法事)供養。
1131 故左大弁某周忌法事、三重塔造立供養。(承暦記に付注)
1136(保延2)三十講「法華經序品の心を 一人のみ尋ねいるさの山深みまことの道を心に
ぞ訪ふ 民部卿顕頼」(玉葉和歌集釈教)
1185(元暦2)7月9日 午刻大地震、鐘樓・経蔵回廊・西中門顛倒(吉記)
1192(建久3)派遣誦経使(「師守記」貞治3-7-9)
1228(安貞2)醍醐寺と確執(「百鍊抄」6-19条)、八講(「師守記」)
1468(応仁2)8月28日 永安翁子佐侍者卒。同月14日 自西兵入狼藉諸堂、暴虐不可言(碧
山日録)
1470(文明2)7月20日条「昨日下午醍醐并山階焼亡」(大乘院寺社雜事記)
9月2日条「7月19日勸修寺旅店為敵被破了…文書重書記録等大略紛失」(親
長卿記)
1512(永正9)5月4日 「縁起出来、絵光信」(元長卿記。甘露寺)
1532(享禄5=天文元)5月21日罷向勸修寺、23日参入幡(一寺鎮守也。古老云、石清水以
前勸請)。(二水記=権中納言鷲尾隆康
1485～1533、末茂流参議隆頼男、実権大納言季経卿(四辻、本名季熙、法名宗空)二男
1594(文禄3)豊臣秀吉、伏見道造作の為替地を提案、拒否に遭い八百石を六百石に減高
1661(寛文元)～73 本堂(霊元天皇仮内侍所)拝領
1669(寛文9)徳川氏、寺領を寄付(宇治郡名勝誌)
1682(天和2)済深法親王(豐子、中興(修水池園記))入寺。このころ堂塔施入
1695(元禄8)徳川氏、寺領を寄付(京都府山科町誌)
1697(元禄10)書院(明正天皇旧殿)拝領
1854(嘉永7=安政元)「勸修寺宮」千十二石 無住(雲上明覧大全。京都御役所向大概覚
書)。
1864 晃親王(伏見宮邦家親王第一王子)還俗、山階宮家創設。